

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2017) 第17巻:86-87.

旭川医科大学回顧資料(18)1990(平成2)年度 【回顧資料A】図書館の電
算化とOPAC

=回顧資料A=

図書館の電算化とOPAC

1. はじめに

本学の図書館に、平成2年2月図書館システム用電算機が導入されることになった。これは、かねてから文部省へ概算要求を提出していたもので、ようやく本学も学術情報センターと結んで、文部省の学術情報システム構想への参加が可能となり、平成の幕開けと同時に本学図書館の新なる再生への出発点として印象付けられるものとなるに違いない。

今日まで、図書館では業務の電算処理について幾多の検討を重ねてきた。その結果を電算化基本計画にまとめ、各電算機メーカーと図書館システムの交渉を行い、最終的に機種選定委員会で決定した導入機種は日本電気のNEC 3100/50 Aシリーズの電算機である。この電算機で運用されるトータルシステムとしてのソフトウェアが、LICSU (Library Information Computer System of University) システムと呼ばれるパッケージソフトである。

2. LICSUについて

このシステムは、現在全国30数大学の国公立の大学図書館で運用されている実績のあるソフトウェアである。数ある図書館システムのなかでも評価の高いシステムで、然もトータルシステム(発注・受入から目録整理を経て貸出まで)として稼働させることのできる唯一のパッケージソフトと言っても過言ではない。

LICSUは、日本電気と兵庫教育大学図書館との共同開発によって生まれたシステムであり、開発主体が国立大学図書館であることと、かつ中小規模大学であることが、本学のような単科大学図書館の導入システムとして適していると思われる。通常システムの開発は、業務の分析から設計に到るまで、長い時間と膨大な経費がかかるものである。幸い過去に苦勞しながらシステム開発を行ってきた先行館があり、そのノウハウを活かしたパッケージソフトを導入することによって図書館の電算化を効率よく発展的に運用できるものであろう。LICSUもそのようなシステムのひとつである。

ここで行われる業務処理は、大きく図書管理、書誌・所蔵管理、雑誌管理、利用者サービスの4つのサブシステムに分けることができる。そしてこれらのサブシステムは、すべて図書・雑誌の目録データベースの形成あるいはそこから利用と有機的に結ばれているシステムである。その主眼は、利用者への図書・雑誌情報の迅速な提供を目的としている。

3. OPACについて

前述した目録データベースをオンラインで検索して、必要な図書情報を入手する手段をOPAC (Online Public Access Catalog) と呼んでいる。現在のカード目録や雑誌目録をみるのと同じことで、図書館資料の目録類が、電算機のディスクのなかに収められたと言ってよい。

このOPACの特徴は、誰でもが自由に利用者端末に向かって、簡単な検索語(キーワード)を入力して、図書情報を知る事ができる点にある。現行のカード目録は、正確な書名・著者及び件名でしか探し得なかったが、OPACではこれらの他に書名の重要語が検索語(最大15文字)として登録されているため、一般的に思いついた単語の組み合わせで検索できるようになっている。図書館のオンライン情報検索サービスは、文献データベースの知識と特別な研修・訓練が必要であるが、このシステムは、ワープロ操作を知らない利用者でも簡単に扱うことができる。その代わり制限もあり、論理演算が積集合のみで、かつ集合の絞込みに限定される。また入力できる文字が英数カナ(1バイト)に限られるなど、電算機資源の容量の問題もあるが、利用者がマニュアルを見なくとも、簡単に操作できることが、これらの制限を乗り越えて許容できるものであろう。

4. 今後の課題

OPACは、実際に図書館利用者が利用できるようになるまでには、今少し時間がかかる。というのは、導入直後ではOPACで提供できるデータが、電算機のディスクのなかには、図書・雑誌の目録データベースとして何も入っていないからである。OPACが利用できるには、既に本学で受け入れている10万冊近い図書・雑誌のデータを入力しなければならない。このためには、時間と人手と経費が必要になる。図書館では、関係各位のご理解とご協力を得て、少なくとも平成2年度内に図書館で所蔵している約3万冊の図書データの入力を行い、その後各研究室に所蔵されている図書を年次計画を立てて、目録データベースの構築を図って生きたいと考えている。

その他、図書閲覧室に配置されている利用者端末は2台に限られるため、将来的には各研究室にあるパソコン等で、内線電話を用いて無手順で図書館の目録データベースにアクセスできるようにしたい。

図書館をめぐる環境は、今大きく変わろうとしている。スタティックな図書館から、文献情報のダイナミズムに応えることのできる情報センターへの転換を求められているのである。このようななかで、図書館は利用者に対して、いかに効率よく、**適確**に情報を提供できるか、図書館の資料の利用と絡めて、電算機の導入を機会に検証していかなければならないと考える。

(図書課)